

○岡本章秀

(九州沖縄農研久留米)

【目的】

常緑性ツツジの芳香性育種では、北アメリカに分布する落葉性ツツジが利用されてきた。しかし、常緑性ツツジと落葉性ツツジとの交雑は、種子を得ることが難しく、実生は弱勢を示すことが多いため、実用品種は育成されていない。1984年に愛媛県で発見されたトキワバイカツツジは、香りの強さは落葉性ツツジほどではないが芳香を有する。本種は常緑性ツツジとの交雑において一側性不和合性を示し、種子親に用いた場合に健全な成育を示す実生が得られる (Okamoto・Ureshino, 2015)。2008, 2009年にトキワバイカツツジに常緑性ツツジの花粉を交雑し、養成した実生が2016年に開花に到ったので、芳香性や開花特性について発表する。

【材料および方法】

2008年4月にトキワバイカツツジ×「久留米64号」(クルメツツジとサツキの交雑種)および2009年4月にトキワバイカツツジ×「関寺」(リュウキュウ系)の交雑を行い、11月に採種、翌年2月に播種した。ガラス室で養成した結果、2016年4月に各交雑組合せの1個体が開花した。この計2個体について、官能による香りの評価と開花時の花の形態特性等の調査を行った。

【結果および考察】

香りについて、強さと質を表1に示した。トキワバイカツツジ×「久留米64号」から得た実生(以下、雑種A)は、香りの強さは微か、香りの質はウッディフローラル様であった。トキワバイカツツジ×「関寺」から得た実生(以下、雑種B)は、香りの強さは微か、香りの質はレッドクローバー様であった。トキワバイカツツジの香りは、やや弱いウッディフローラル様、「久留米64号」は無香であり、両者の雑種第一代では香りの強さが両親の間、香りの質はトキワバイカツツジ由来となった。また「関寺」の香りは微かなレッドクローバー様であり、ウッディフローラル様とレッドクローバー様との雑種第一代ではレッドクローバー様が優性となった。しかし、香りの質には発散香气成分の組成バランスおよび微量成分が関与するとされることから、香りの質の遺伝性を明らか

にするためには、両親や片親だけに認められる発散香气成分の生合成量を調査する必要がある。

開花特性について、交雑から初開花までに7, 8年を経た。これはツツジ属遠縁交雑における一般的な期間であった。開花時の花の形態的特性を表2に示した。開花日は雑種A, Bともに両親より早かった。花の大きさは雑種Aが両親よりやや小さく、雑種Bは花粉親である「関寺」に近かった。雄蕊数は一般に両親の間となるが、雑種Bはそうならなかった。花色は雑種A, Bともにpurple-violet系(RHS colour chart)となり、両親よりも青みが強かった。雑種Bには花粉親「関寺」と同様に萼および花柄に腺毛が認められた。酢酸カーミン液による花粉の稔性調査の結果、雑種A, Bはともに雑種不稔と考えられ、交雑を進めるためには染色体の倍加が必要であった。

表1 トキワバイカツツジ×常緑性ツツジから得た実生2個体の香りの強さと質

品種・系統	強さ	質
トキワバイカツツジ×久留米64号	微か	ウッディフローラル様
トキワバイカツツジ×関寺	微か	レッドクローバー様
トキワバイカツツジ 久留米64号	やや弱い	ウッディフローラル様
関寺	無	—
関寺	微か	レッドクローバー様

表2 トキワバイカツツジ×常緑性ツツジから得た実生2個体の開花特性

品種・系統	開花日	花冠長 (mm)	花冠幅 (mm)	雄蕊数 (本)
トキワバイカツツジ×久留米64号	4/7	42.9	43.7	5
トキワバイカツツジ×関寺	4/5	61.0	58.1	5
トキワバイカツツジ 久留米64号	4/13	44.9	44.9	5
関寺	4/25	48.9	48.4	5
関寺	4/16	65.3	57.1	9

表2 続き

品種・系統	花色 (RHS)	フロッチ色 (RHS)	萼・花柄 の腺毛	花粉 稔性
トキワバイカツツジ×久留米64号	81C	61A	無	—
トキワバイカツツジ×関寺	82C	59A	有	—
トキワバイカツツジ 久留米64号	77D	59A	無	+
関寺	72C	57A	無	+
関寺	77C	60A	有	+